



Begebenheiten

des
Capitains von der Russisch-Kaiserlichen Marine

Grolowin,

in der

Gefangenschaft bei den Japanern

in den

Jahren 1811, 1812 und 1813,

nebst

seinen Bemerkungen

über das japanische Reich und Volk

und

einem Anhange des Capitains Riford.

Aus dem Russischen übersezt

von

Dr. Carl Johann Schulz.

Erster Theil.

Mit einem Kupfer und einer Karte.

Leipzig, bei Gerhard Fleischer dem Jüngern.

1817.

にほんゆうしゅうき
日本幽囚記 ドイツ語版

ゴロヴニン著 ライプチヒ

1817-8年刊 2冊

縦23.0cm 横14.1cm

掲出の書はロシア軍人ゴロヴニン著『日本幽囚記』のドイツ語版である。なんの変哲もない標題紙だが、江戸時代後期における日本とロシアのある事件の顛末を物語る。

開国前、日本近海には欧米諸国の軍艦が出没し様子を窺っていた。もちろん日本に開国、通商を迫るためである。

一八一一年（文化八）、ロシアの軍艦ディアナ号艦長ゴロヴニンは日本領国後島を探査中、松前藩役人に捕えられ、函館に収監される。二年余り後に母国へ帰還するが、その体験と見聞を綴ったのが本書である。



高田屋嘉兵衛肖像画

ドイツ
アナ号
副官リ
コルド
はゴロ

ヴニン救出のため、国後附近を航行中であつた観世丸船頭高田屋嘉兵衛を捕え、ゴロヴニンとの人質交換を企てる。

この間リコルドは嘉兵衛の崇高な人柄に触れ、信頼を寄せ、嘉兵衛もゴロヴニン救出に力を惜しまなかつた。

本書は一八一六年、ロシアで出版されると時を経ずしてドイツ語訳本が完成。さらに仏、蘭、英語の各版が出、日本情報を欲していた国の人々

に読まれる。掲出のドイツ語版はその先鞭をつけた意味深い出版となった。

後年、ロシア正教の若き神学生ニコライは本書に感銘を受け、高田屋嘉兵衛に憧れた。ついに生涯の布教地として日本を選ぶことになる。

やがてニコライは函館の土を踏み、日本における最初のロシア正教伝道師になった。東京駿河台に見事な建築美を誇るニコライ堂を建てたニコライである。

本書は江戸後期の一時期における日露両国の人間味あふれる物語でもある。

（天理図書館 早田一郎）

立教173年教祖誕生祭記念展覧会

会期：4月17日（土）～19日（月）、24日（土）～26日（月）

会期中無休・入場無料 午前9時～午後3時半 於 天理図書館展示室

（天理図書館 Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>）